校 長 室 だ よ り

防府市立牟礼中学校
R元．９．１

校歌に込めた思い～作詞者 岡田岩吉先生～

校長　田中　俊光

前回の校長室だよりでは、「校歌に込めた思いー作曲者 高橋正剛先生ー」について書きました。今回は、作詞者 岡田岩吉先生の思いを紹介します。平成６年の牟礼中学校開校１０周年記念へ向けて書かれたものです。

〈作詞者略歴（岡田岩吉先生）〉

明治４４年７月２５日生　大島郡橘町出身　国学院大学卒業（高等師範部）

山口青年師範学校、山口大学教育学部、山口芸術短期大学の国文学教授を歴任。

校歌の作詞は現在県内で２００校におよび、本校をはじめ牟礼小、牟礼南小、富海中、桑山中など、市内にも多くの学校がある。また、防府市民歌をはじめ、光市民歌、豊北町民歌の作詞の他、「組曲佐波川」など多くのものがある。

〈防府市立牟礼中学校校歌作詞の経緯と想い〉

倉重校長さん（牟礼中学校初代校長）から校歌の依頼を受け、私の宅まで態々お願いに来てくださったのは、四月半ば頃ではなかったかと思います。そして、私がその下見に本校を訪ねたのが、四月二十二日でした。校長室で、既に完備している校旗や校章、それから校訓などが示され、学校長としての教育方針なども十分うかがうことが出来ました。

皆さんの卒業した、それぞれの小学校にも校歌というものがあったでしょう。校歌というのは、学校の教育上の大切な主眼というべきものを歌い上げて、それを全校生徒の協力や団結の絆とし、教育効果を高めていこうというものです。校旗だとか校章だとかも同じことで、それを象徴的に表したものといえましょう。

私は校旗のあのエンジの地色に、古い時代を思わせる雰囲気と、盛んな熱情の燃えるものを感じさせられるのです。それに白でペンを描いて「牟礼中」をデザインしたものには、現代的な明るさや新鮮さを感じさせられます。外は春雨だし、私はゆっくり校旗のそうした感覚に浸らせてもらうことにしました。そのうち、雨足が繁くなってきたので、大平山も矢筈が嶽もさやかには望めませんでした。が、二時間ばかりの間に、私の脳裡に漸次定着してきたものは、次のようなことでした。

① この地に残る俊乗坊**重源**上人の足跡や、南朝支援に起き上がった青尊・教乗などの事績を描いてみよう。

② そうした事績を、単なる過去の出来事として描くのではなく、それを今日の若者の心情や行動にオーバーラップしていこう。

③ 幸い**校訓**に**至誠・自律・奉仕**という三項目が示されている。**歌詞も三章節**にして、それぞれを、感動的に歌い上げるよう工夫してみよう。

次の機会は五月三日でした。早朝私は自転車を踏んで、学校の西側の道を上って行きました。朝から五月晴れのいい天気。私はたっぷり学校の雰囲気に浸ることが出来ました。一体に私は、こういう人気のない早朝だとか黄昏時、あるいは真夜中などに運動場の片隅に佇んで、想いに更けるのが好きです。この場合などにも人影など全くありませんでした。が、そこに三本白線の制帽や制服をつけた、初々しい皆さんの姿や歓声が、見えたり聞こえたりしてくるのです。構想を練るなどというのは、あまりにも大げさですが、こうして想いをめぐらしていて、「ようし、この調子で歌おう」という決意にも似たものが浮かんできました。五七調という荘重な調子です。あなた方の純粋で新鮮な若々しさを描くには、あの校旗のエンジ色のような五七調しかない。 ── 私はそう決意したのです。

「　大平の　　山裾とほく
　　さやかにも　　樹々の梢と
　　輝ける　　われら若人
　　青雲の　　空もあかるく
　　清らなる　　丹き心を
　　ひとすぢに　　掲げてゆかむ　」

その朝、大平山の裾野はまだ静寂に包まれていて、遠く紫色に烟っていました。小一時間もたった

頃でしたか、閃光一線、山頂から五月の太陽がふりそそぐと、あたりの樹々の梢が一斉に伸び出すような勢いを感じさせます。すばらしく荘厳で、躍動の瞬間です。私はすぐ、そうした景観の中に、あなた方全校生徒を配してみました。すると、その景観にも増して、あなた方が美しく輝いてみえるではありませんか。若さ、純粋さ、清潔さ…まさしく、あなた方は五月の朝の樹々の梢以上に輝くものを具えているのです。荘厳そのものといわなければなりません。

空には一点のかげりもない。「青雲」というのは、もともとこういう空を呼んだものでしょう。その空のように明るい、純粋で、清潔で、無垢な皆さんの心の中に、誠の心、まごころ、**至誠**を植付けてゆこう。 ── これが、校訓の第一に掲げられていることです。私はそれを古い日本語の「丹き心」としました。さて、この**丹き心（至誠・まごころ）**というのは、どういうものか。きっと先生からお話があると思いますが、私は次のように捉えています。

人間の心というのは、ころころと変わり易いところからこころと呼び始めたという説がある。それほど人間の心は変転極まりないものだ。例えば、目に美しいもの、耳に快いもの、鼻に香しいもの、舌には甘いもの、皮膚に柔らかいもの ── その感覚の多少や度合いによって、人の心は限りなく揺れ動く。そしてそこに、人間同志の違和感や不信感が生じてくる。全くこれでは、教育のない禽獣と同じだ。そこで人間はもっと次元の高い精神を身につけなければならない。それは、変転し動揺する心を制するもの、私利私欲をおさえて生活を律していく精神を養わなければならない、というのです。仏教では、こういう高次な精神を「心王識」といっています。私どもの祖先がいう「丹き心」も、こうした精神の純真な状態をいったのです。偽らず、欺かず、穢れのない、清らかな純粋な真情を、あらゆる道徳の根底に求めてきました。

私の書斎に、明治時代に山口県出身の総理だった桂太郎の「**至誠**無息」という扁額がかかっています。私はそれを「**至誠**やむなし」と読んで、どこまでも**至誠**を貫き通していくことを心掛けてきました。ところがある時私の先輩が、それを「**至誠**息なし」と読んで私に申しました。「心が動揺して**至誠**が捉えられぬ時には、自分の呼吸を止めてみろ。すると、おのずからその本心が判然としてくる。それが**至誠**だ」。それからは、私は息を止めて、自分の**至誠**を確かめることにしています。神仏の前に額づいた時と同じように。…

「孟子」に「**至誠**にして通ぜざるもの未だこれ有らざるなり」という有名な一句があります。私どもが尊敬してやまぬ吉田松陰先生は、それを生涯の座右の銘としてきました。先生は講義するのにも、同僚や上司に接するにも、この**「至誠」**を以て当たりました。動かぬ本心がそこにある限り、必ず相手には理解されると固く信じていたのです。ところが安政六年十月二十七日、**至誠**を以て幕吏を説得したのにもかかわらず、遂に江戸は伝馬町の獄舎で処刑されることになりました。獄中から、萩の父、叔父、兄宛の書簡に、

「平生の学問浅薄にして、**至誠**天地を感格する事出来申さず、非常の変に立至り申候」

と認めておられます。天地を感動さすだけの**至誠**が不足していて、こういう羽目になったことは、自分の学問が十分でなかったからだと、ご自分を責めておいでになるのです。

私どもが教育を受ける。勉強する。さきざき大学などで学問する。その勉強なり学問なりには、常に**至誠**が裏打ちされていなければなりません。世の中に出て、どういう仕事についても同じことです。今日のように、生活が豊かな社会になればなるほど、こうした高い精神の高揚が大切になってくることは間違いない。そうした意味で、新設された本校の校訓に、**至誠**を据えられた校長さんや先生方の達見に、私は深い敬意を表するものです。

「　都べに　　いらかも高く
　天平の　　そを興さむと
　いたづける　　聖を知るや
　　たくましく　　力にみちて
　　限りなき　　学びの道に
　　ともどもに　　励みてゆかむ　」

第二章節については、もうお気付きの方が少なくないのではないかと思います。「聖」というのは、阿弥陀寺を創建された俊乗坊**重源**上人その人をさすのです。名高い奈良の東大寺は全国の国分寺の総本山として、天平勝宝四年、聖武天皇の勅願によって造られました。木造の伽藍としては世界一といわれます。ところが、この東大寺は、今から八百年前、平氏が京都を追われて福原へ、福原から屋島、壇の浦へと落ちていく際、平重衡によって焼打ちされ、灰燼に帰してしまったのです。

その東大寺を復興し再建するため、後白河法皇の命により、この周防の国が造営料国に宛てられました。国庁に上がってくる税金を、東大寺の造営に当てようというのです。そこで、東大寺の俊乗坊**重源**上人が、国司として来任することになりました。**重源**上人が苦労に苦労を重ねてその大任を完

うし、「天平の甍」さながらにその復興再建を果たしたことは、あまりにも有名なことです。阿弥陀寺には、その遺品や業績が残されていて、昔を偲ぶことが出来ますし、本校の玄関脇には、その山門の彫塑が飾られて、深い感銘を与えてくれます。要するに、牟礼というとこの俊乗坊**重源**上人によって代表されるように思うのです。

こうした歴史的人物の特色は、私どもが考えるような雑事ではなく、国家的大目的を掲げて、それに向かって忍耐強く努力を重ねているということです。決して拱手傍観していて、あれだけのことが出来るものではありません。滑の山から、あれほどの用材を伐り、それを筏に組んで佐波川を下し、瀬戸内海を大阪へ、大阪から淀川をさかのぼって奈良まで運んだのです。これは大変な事業です。私どもが、皆さんに強調したいのはここです。一つの目的を達成するためには、どうしても自分自身にたくましい体力とか精神力をつけておかなければならない。学力などもその一つです。役人になる、商人になる、大工になる、左官になる。如何なる仕事に就くにせよ、皆さんが薄志弱行の徒では果たせないのです。学業に運動にともどもに励んでほしいと願わずにいられないのは、そのためなのです。

ここで、勉強するとか、運動するとかいうことを一つ一緒に考えてみましょう。それには校訓に示された**「自律」**ということが、必須の条件になってくるのです。私どもはどうかすると「勉強しろ」とか「運動しろ」とか他から言われて、仕方なしにそれに応じるというのがあります。これでは効果が上がろう筈がありません。**自律**というのは、他からの制約を受けることなく、自らがそれに立向かうことをいうのです。無論皆さんはまだ経験が浅いのだから、先生や先輩の教えに従わなければなりません。が、自分の勉強や運動は、先輩が代行するものでもなければ、先生が代行するものでもない。充実されるのは自分の頭脳であり、自分の筋肉なのだ。収穫は自分が得るのではないのか。卑近な話だが、それは生理のようなもので、自らの腹は自らが満たし、自らの排泄は自らが果たす以外にはない。親や教師に代理がつとまるというものではないのではないのか。

もう一つ。勉強するとか運動するとかは、自分自身の生理と同じだから、その能力や体力に応じて行うことが大切になってくると思います。自然科学に興味を持つ子、文学に心をひかれる子、音楽や絵画が好きな子、いろいろあっていいのではないですか。世の中というのはオーケストラの舞台であって、さまざまな能力の人が、それぞれの楽器を奏でながら、全体に調和していこうというのです。「いたづく」というのは、骨折り、病気、苦労という意味ですが、一つの仕事に打込み、人との関係が生じてくると、そこに喜びが湧いてくるものだ。希望や期待が生じてきたからなのでしょう。一流な人、すばらしい人というのは、それぞれ、そうした希望と努力を重ねた結果だといって差支えないのではないでしょうか。

「　北に負ふ　　矢筈が峯に
　　南風は　　つひに競はで
　　散りにける　　命しのばる
　　花影も　　夕日に映えて
　　いたはりの　　心やさしく
　　世の人に　　尽してゆかむ　」

社会科で建武の中興の話を聞いたことはありませんか。足利尊氏の野望から遁れるため後醍醐天皇は吉野の行在所に移られる。これが南朝です。京都では尊氏が光明天皇を立ててこれに相対しました。北朝です。新田義貞とか、楠木正成・北畠親房といった忠臣が南朝を助けましたが、遂に後醍醐天皇は、吉野で崩御になる。延元四年八月十六日のことです。「南風競はず」というのは、南の風が弱くって、吉野の遺恨の桜の花弁が京都に還ってゆけぬと、南朝の悲運に同情し慨嘆した詩人たちの作だったのだろうと思います。その頃、矢筈が嶽には験観寺という寺があって、十二の寺房が連なっていました。そこに国庁の役人の清尊・教乗といった人々が兵を率いて立てこもり、尊氏が九州から京都へ攻め上る、その後方撹乱にでた、敷山城の義戦がそれです。けれども多勢に無勢、遂に多くの若者が寺房に火を放って、その命を落としていきました。時に延元元年七月四日（陽暦八月二日）のことです。後世、里人たちはその忠魂を哀れみ、桜樹を植え、紅葉を育てて、長くこれを弔ったといいます。

何年前だったか、私が航空自衛隊防府北基地の隊歌を依頼されて、この敷山城の悲運を歌いました。後、ある隊員から、矢筈上空を飛ぶと、すぐあの隊歌が口をついて出てきますと感慨深く語ってくれたことがあります。何人であれその念願に一命を賭した人というのは、私どもの心に深く刻み込まれるもののようです。おのずと頭が下がり、真情に打たれ、思いを強うするものです。あなた方も、課外などすませて夕刻校門を後にする時、もう一度矢筈が峯をふり仰いでみるがいい。折しも夕陽に映えて、花弁は涙して頬に舞い、紅葉は血よりも赤く染まって耳もとに語りかけるに相違ない。雨につけ嵐につけ、あるいは雪につけ、あの峯を仰いで育ってきたのである。そこに散った若い命を追慕し、敬仰し、魂は心の奥深く生きつづけているのに違いない。

人間は自分一人だけで生きているのではない。「人間」という文字は、人と人の間と書いてある。親と子という間柄、先生と生徒という間柄、先輩と後輩という間柄、さては同級生という間柄。その間柄で人々は生きているのだ。その間柄を生きる心掛けを、孔子は「仁」といった。現に仁という字は人が二人と書かれている。その意味は、相手の心の中を思いやる、やさしく思って慰めてやるということです。

それをもっと広げてみると、矢筈が嶽に散った人々も、またそこに桜樹を植え、紅葉を育てた人々も、私どもと無縁の間柄ではないのではないか。「袖振りかわす」といい、「一樹の陰　一河の流れ」というのもそれ。道辺に立って、道に迷っている人があったら、自分と無関係の者と思ってはならぬ。軒下に立って泣いている人があったら、自分の深い関係者だと知れと、昔から教えられている。それらの人々に「いたはりの、やさしい心」を注いであげよう。何が美しいといっても、このいたはりの心ほど、身にしむように美しいものはないと、私などは考えています。

曹洞宗の寺に参ると、経文として大切に読まれている「修証義」というのがあります。有名な**道元**禅師の書かれたものを、手短かに整理して編集したものです。それを読んでみると、社会のために、人々のために**奉仕**することこそが、佛教の極妙だと説いてあります。極妙というのは、真髄というほどの意味だろうち思いますが、そうした**奉仕**の心掛けのある人は、それがたとえ七歳の少女であったとしても、立派な私どもの先生、師匠だと称えています。校訓や校歌が明示する、本校の皆さんの**奉仕**の精神と活動に、世の人々は頭を垂れて感謝することでしょう。

皆さんは「母校」という言葉を深く考え、感じたことはありませんか。父の仕事の都合などで、やむなく転校し、旧友や教室や登下校の道々を懐かしく想った経験はありませんか。一般的には、私どもは平素、平和で豊かな母国に育って、何不自由なく母校で教育を受けています。従って、この母校だとか母国だとかいった言葉を、身につまされて味わったということがないのです。

私は大島郡の浮島という小島で育った者ですが、私の父などは出稼ぎで遠くハワイに行っていました。「遠く」といいましたが、飛行機が飛ぶ今日と異なって、明治の頃の話です。向こうに行って日夜、母国日本を想うて、地図にも描かれていないような小さな浮島を恋うて、片時も忘れられなかったと、よく私どもに語ってくれました。母港なども、遠洋漁業の漁船にとってみれば、まさしく命綱のようなものでしょう。

皆さんを教え育ててくれた、この牟礼中学校が母のように、やさしく慕われてくる時があるに違いありません。人生は決して順風満帆の時だけではない。一敗地にまみれて、天涯千里の果てに流浪することがないとはいえぬ。そんな時、旧友を思い、恩師を思い、懐かしい母校の面影が眼前にかかってきて、声をあげて泣き出したくなってくるものです。それがあなた方の母校でしょう。

「　ああ　　牟礼中　　牟礼中
　　われらの母校　」

と、各章節に付したのは、単なる形式ではありません。この中に温もりを感じ、懐かしさを呼び、飛んでいって、思い切り泣きたいと思う母校であってほしいと願ったものです。そんな母校にしなければならない。私のような年齢になっても同じこと ── 行って何でも語りあえ、しがみついてでも泣ける、おふくろのふところのような、やさしい母校であってほしいのです。それは、実にあなた方自身の手で築いていく以外にはない。本校の校風を築いていくのは、実に皆さん自身であることを、私は繰り返してきたつもりなのです。

中学の教科書などにもとられていますが、若山牧水の歌に、

「　幾山河越えさりゆかば淋しさの果てなむ国ぞ今日も旅ゆく　」

というのがあります。今日は何不自由のない恵まれた、豊かな時代だと申します。が、どこまで行ってみても、人の心の欲望には限りがありません。そしてその限りない欲望の陰に、人間の尊い**至誠**だとか**自律**だとか**奉仕**だとかいう精神は失われていって、牧水にとっては「淋しい国」になっていったのです。

「東京砂漠」という言葉がありますが、都会にはそうした人間的な美しさは存在しなくなったと牧水は大正のころ既に、それを感じとっているのです。それがこの短歌なのです。

しかし、皆さんは、美しい環境と、人情味あふれた中で、人間最高の**至誠・自律・奉仕**の精神と実践の教育を受けています。すばらしいことだといわなければなりません。皆さんのような青年期というのは、それに気づき、それを追求していく時代です。より真なるもの、より善なるもの、より美なるもの、そしてより聖なるものを求めて「今日も旅ゆく」のです。時に科学に、時に文学に、時に芸術・宗教に眼が開いていくのですから、これを大切にしてゆかなければなりません。そこにまた矛盾や反撥がないとはいえませんが、誰もが通っていく人生の峠なのです。その時、あなた方に勇気を奮い起こさせ、あなた方をやさしく抱いてくれるのが、この校歌だと私は固く信じております。